

見えない陰での働きを積み重ねよう



今年も教祖殿前の梅は可憐な花を咲かせた

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

さあ／＼これ根のある花は遅なる。なれども
年々咲く。又枝に枝が榮える。根も踏ん張る。
こゝの道理をよう思やんしてみよ。

明治24年11月1日

眞明組初代講元・井筒梅治郎様は、教祖に初めてお目通りさせていただいたとき、教祖から「大阪へ大木の根を下ろして下されるのや。」とのお言葉を頂戴されました。

大きな木には、それに相応しい大きな根が必要です。自らは土の中に隠れ、見えないところで水分や栄養を吸い上げて、枝葉の先々にまで行きわたらせます。大地に根がしっかりと張っていれば、枝が張り、花が咲き、やがて大きな実を結び、翌年もまた花を咲かせるでしょう。初代様は大勢の信者の先々にまで心を配られ、眞明組の「大木の根」としての生涯を送られました。

大きな御守護の陰には、必ず目に見えないところでの眞実があります。身上・事情のたすかりを願ってお願いごとめを勤める。教会に日参し、ひのきしんに励む。「あの人になすかっていたきたい」という思いから心を定め、見えないところで眞実を積み重ねることとは、きつと先々の結構な姿に繋がるでしょう。

たとえ些細なことであっても、人をたすけるための伏せ込みを積み重ね、教祖の年祭にはそれぞれが大きな実りをお見せいただきたいと思ひます。

正面四方

1月26日の春季
大祭神殿講話にて
中田善亮表統領は、
年祭を勤める意義
について力強くお
話しをされ、その
中で特にようばく
のおさづけの取り

次ぎをお促しくださった。

昨今のコロナ禍の状況がい
つまでも続くとは思えないが、
今はオミクロン株による第6
波が世界中を混乱に陥れてい
る。その中で、人対人で、し
かも直肌で取り次ぐおさづけ
は、相手から断られることも
多い。

そんなとき、おつとめを勤
めながら、ふと思ひ浮かばせ
ていただいたことは、家族な
らば遠慮なくおさづけが取り
次げる、ということ。そこで、
妻が身上ならば夫が、夫が身
上ならば妻が、おさづけの取り
次ぎをするようお願いした。
誠意が届いて素直に聞いてく
ださり、おかげでおさづけの
理を拝戴して以来、一度も取
り次いだことのなかったよう
ぼくの丹精に繋がった。何か
らでも知恵を絞って成人に繋
げたいものである。

(奥)

《2月月次祭 挨拶》

教祖にお喜びいただくために

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃は時旬の道の御用の上にご丹精くださいまして、ご苦勞様でございます。また、只今は2月の月次祭を皆様と共に無事滞りなく、勇んで勤めさせていただきましたことは、大変有り難い次第でございます。

現在、非常に感染力の強いオミクロン株が猛威を振るっています。国内では感染者は減少傾向にありますますが、注意を怠ってはならない状況は、依然変わりません。このコロナ禍にあつての道の御用への向き合い方について、真柱様は年頭のご挨拶の中で、……安心して御用ができる 때가、いつごろ来るのか予想もつきません。

安心して御用ができて、できなくても、時間は同じように過ぎていきます。できないのはコロナのせいだというようにせずに、与えられた条件のなかで、やらなくてはならないことをいかに進めるかということを、いまの時旬を考えて、それぞれのつとめを果たしていただきたいと思います。

『みちのとも』立教185年2月号7頁とお話くださいました。動こうにも動きづらい状況があるのは確かです。大勢が集まろうと思っても集まらない。病院に見舞いにも行けないし、おたすけにも行けない。講社祭に足を運びづらい。こうした状況はあると思います。だからといって何もしない

れば、それはコロナのせいになっていることになります。

大勢が集まらない、ではどうするのか。おたすけに行けない、ではどうするのか。講社祭ができない、ではどうするのか。これをよく考えて工夫と苦心をすることが大切です。今はコロナ禍という厳しい条件が与えられています。その条件の中でできることからさせていただく。やらなければならぬことをしっかりとさせていたでいて、コロナ禍を乗り切りたいと思います。

各々が思案して実践に移す

さて4年後に教祖百四十年祭が執行されますが、教祖の年祭と人間の年祭では、つとめる意味合いは異なります。人の場合は定めた日に、縁に繋がる者や関係者が集まって故人を偲ぶのですが、教祖の年祭は信者が集まって、教祖の道すがらをお偲び申し上げるだけで済ませてはならないものです。教祖の年祭の場合は、そこに至る三年千日と仕切った期間があります。いわゆる年祭活動です。三年千日についてはおさしづに、

五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えまいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。
(中略) 僅か千日の道を通れと言うのや。(中略) ひながたの道より道が無いで。

明治22年11月7日

とあるように、三年千日と期間を仕切ってひながたの道を徹底して、集中して通ることを仕込んでくたさっているのです。つまり、ひながたを辿るとはどういうことか、どのようにしてひながたの道を通るのかということ、各々が思案をして実践に移すこと。そして教祖のひながたの道を教会の動きに反映して、一手一つに実動すること。これが年祭活動であると考えます。

年祭活動をなぜするのかということについて、かつて真柱様は

「教祖にお喜びいただくためにするのだ」といったお話をされたことがあります。これが一番分かりやすいと思います。教祖にお喜びいただくために年祭活動はあるのです。つまり、教祖の年祭を勤める意義は、全教が同じ旬に一手一つに仕切って教祖のひながたを辿らせていただくという真実をもつて、教祖にお喜びいただき、教祖の親心にお応えさせていただくことです。この意義を、まずは各々が心にしっかりと治めて、これを胸から胸へと伝えていただきたいと思います。

いずれ本部から年祭活動の具体的な打ち出しがあるでしょう。また芦津としての取り組みも模索していかなければなりません。いずれにいたしましても、年が明ければ年祭活動はスタートするわけです。

しかし、いきなり全力疾走することなどできません。相応の準備が必要です。そう考えれば今年は大切な年になると思います。年祭活動を迎えるための心づくりをする年、三年千日を成人の旬、たすけの旬にするための、その御守護を頂くための理づくりをする年です。

年祭活動はまだまだ先のようになっていますが、時間が経つのは早いものです。この前、年が明けたと思っていたら、あつという間に2カ月が経ちました。うっかりしていると、あつという間に年祭活動に入ってしまうような気がしてなりません。お互いに今は三年千日に備える心づくりと理づくりの大切な年だという思いに立って、今与えられている厳しい条件の中で、やるべきことをできることから取り掛かせていただきたいと思います。明るく勇んだ歩みを進めさせていただきましょう。

今月の月次祭、大変ご苦勞様でございました。

(要約)

立教百八十五年 二月 月次祭 祭文

このの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長 井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、子供可愛い一筋の御心から、日夜十全の御守護にお護り下され、慈愛に満ちた御恵みをお垂れ下さいますと共に、時には厳しい節をもつてまで心の入れ替えを促されて、成人の道をお連れ通り下さいます親心の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。私共は、日々心のほこりを払い胸の掃除に励んで、御恩報じに努めさせて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおぢばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、二月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には春寒の折柄も厭わず参らせて頂きました芦津の道の子達が、日頃賜る御恵みに御礼を申し上げ、たすけ心を尽くしてお歌を唱和し、一心にお纏りする真実の状をも御覧下され、親神様にもお勇み下さいまして、たすけ一条の道の一層の進展の御守護を賜りますよう御願ひ申し上げます。

私共をはじめ芦津の理につながる教会長、ようぼくは、教祖の御教えを素直に身に行つてなるほどの人になる努力を重ね、たすけ一条の道の苦勞苦心を厭わずに、時旬の道の歩みを、一手一つに心勇んで進めさせて頂く所存でございます。

何卒、道のために尽くす誠真実をお受け取り下さいまして、この上共に温かき親心を賜り、時旬に相応しい成人の道をお連れ通り下さいます、陽気ぐらし世界の実現を目指して、心を揃えて前進させて頂けますよう御守護の程を、一同と共に慎んで御願ひ申し上げます。

《2月月次祭 神殿講話》

教祖を身近に感じ

心勇んで通ろう

役員 山本義範

おかきさげに「それ人間という身の内というは、神のかしもの・かりもの、心一つが我がの理」と仰せられます。

身体は親神様からの「かりもの」ですが、心は自身のものとして、自由に使うことが許されています。そのおかげで私たちは、自分の意志と判断で行動できる。心の自由があるからこそ、私たちは日々の暮らしを楽しむことができる。そこにいろいろな思いを巡らせ、夢や希望をもって、創意工夫をこらします。また悩み、迷い、決断し、その結果に一喜一憂します。

よき事をゆうてもあしきをもふてもそのまゝ、すぐにかやす事なり

五号 54

これからハよき事してもあしきでもそのまゝ、すぐにかやしするなりとあります。

六号 100

自分の心で、喜びも苦しみもつきり出している。環境が人生を決定しているのではなく、自分の心が環境をつくっているとも言えます。自分の人生は、自分に責任があるということです。

教祖の教えが心に射し込む

心に自由が与えられた結果、人間は、善悪さまざまな心を使いまします。教祖は、親神様の思召に沿わない心遣いを「ほこり」に例えられました。それは、「をしい、ほしい、にくい、かわい、うらみ、は

らだち、よく、こうまん」の八つで、この他にも「うそ、ついしう」を戒められています。

朝の光が部屋に射し込むと、それまで見えなかった空気中のほこりがキラキラ反射して見えるように、教祖の教えが心に射し込むと、自分のほこりが見えてきます。

自分のほこりに気づかないと、掃除もできません。心のほこりは、誰でも心当たりがあることだと思います。物をすごく欲しくなったり、つい人のための手間や時間を惜しんだり、相手の気持ちを踏みにじったり、おだてられて自惚れたり、ささいなことで腹を立てたりしています。それほど簡単にほこりは心に生じます。

そんな誰にでもある小さなほこりですが、それが積もれば、陽気ぐらしを妨げます。ほこりが舞って視界を遮り、自分のことしか見えなくなり、人の気持ちに無神経になります。物事の奥にある親神様の親心が見えなくなります。苦しみの因を遡れば、各自の心のほこりに行き着くのです。

絶えず掃除をする大切さ

おふでさに、

ほこりさいすきやかはろた事ならばあとハめづらしたすけするぞや

三号 98

どのよふないたみなやみもでけものやねつもくだりもみなほこりやで

四号 110

せかいちうどこのものとハゆハんでな心のほこりにさハリつく

五号 9

とあります。心のほこりが不和を生み、人を孤独にし、勇み心を奪います。欲に振り回され、憎しみや怒りに駆られ、自ら不幸の原因をつくるのではないでしょうか。

心のほこりの教えは、ほこりが積もって大きな問題を引き起こす前に、「絶えず掃除をする大切さ」を教えるためのものです。

せかいちうむねのうちよりこのそふち神がほふけやしかとみでいよ

三号 52

「ほこりを積むまい」と自分と向かい合ってもほこりは払えません。ではどうすればよいのか。



人のために心と身体を使うことで、ほこりは自然に消えていくと思います。ほこりの教えは「してはいけない」という戒律の教えではなく、むしろ「させていただく」と、御恩報じの実行を促す教えではないでしょうか。

御恩報じの行動によってほこりは払われ、心は澄み切ります。曇りないさわやかな晴天のような心になれば、少しぐらい失敗しても立ち直るのも早く、人から心ない言葉を聞かされてもあまり気にならず、「さあ今日は何をしようか」と、心勇んで毎日を送れるようになると思うのです。

おさしづに、
たった一つの心より、どんな理も日々出る。

明治 22 年 2 月 14 日
とお諭しくださいます。

心一つで、どんな人生にもなり
ます。人のために、役に立ちたい
と願う人と、自分のために、人を
利用しようと企む人とは、同じ
人生になるはずがありません。

心は無限の可能性を秘めている
のです。心一つによって、陽気ぐ
らしは近くにも遠くにもなるので
はないでしょうか。

教祖がいつもお側に

8 年前、私が 50 歳のとき、大きな役を頂戴し、心定めの一つとして、しっかりと理の御用を勤めさせていただく上での理づくりと、これからますます増えていく御用を何事も精一杯に勤め切る心づくりということ、毎月一回、歩いておちばへ帰らせていただくことを決意しました。

当日、朝早く起床しましたが、あいにくの雨。どうしようかと少

し悩みましたが、「これはもしかしたら神様の試しかな」という思いが頭をよぎり、行くことに決めただけです。

山を登り始めた頃には少し雨もやみ、心勇んで歩き始めたのですが、普段からあまり歩き慣れていないせいか、上り坂を少し歩いただけで息が荒くなって、休み休みでしか歩けない自分自身に、情けない思いが込み上げてきました。傘を杖がわりにし、少しずつ前に進みました。

一人で山道を歩いていると、体力もない私は、周りの木々が茂り薄暗く、幅の狭い人気のない道なので、寂しい思いや「いつ着くだろう」という不安な気持ちでいっぱいでした。何度も心が折れそうになったとき、「教祖、どうぞおちばまでお導きください」と心で唱えながら歩いていると、不思議なことを見せていただきました。道中、少し休憩していると、普段であればあまり気にしないのですが、そのときばかりは、珍しい見たことのない色のチョウがたく

さん私の周りを回っており、そのチョウを見ると、まるで私の前を先導しているかのように飛んで行きました。ふと教祖が、私を励まし、誘導してくださっているように感じました。「私一人ではなく、御存命の教祖がいつもお側にいて、お連れ通りくだされているのだ」という思いになり、心も勇み、力が湧いてきて、また歩き始めました。

しばらく歩くと、だんだん頭がボーっとしてきて、メガネも熱気で曇り、前がはつきりと見えないようなときに、ちょうど前から一人の方が歩いてくる姿が、一瞬見えました。60 歳ぐらいの赤い服を着た元氣そうなおじさんでした。その人と挨拶を交わし、すれ違い、その後ろ姿を見ながら、やはり教祖は常に励まし、私のようなものでも、おちばで手を広げて待っていてくださるのだと思いました。それまでのいずんだ心も、疲れた身体も、うそのように動くようになり、また歩き始めました。そんなことの繰り返しでした。

初代様の通られた道

とお言葉を頂かれたことを思い出しました。

そして下り道中、民家の見えるところまで来た途端、雨が滝のようになく降り始めました。その後、小雨になったり、強く降ったりと、ずぶぬれになりながら山を下りていきました。そのとき、芦津の初代・井筒梅治郎先生が初めておちばへ帰られて、教祖から、

「あの雨の中を、よう来なされた。」

『稿本天理教祖伝逸話篇』

七一 あの雨の中を

今と昔では、雨の激しさや道路の整備状況などさまざまな部分で違いもありますが、初代様の通られた道を万分の少しでも感じさせていただけたことに、心からお礼申し上げ、一步一步踏みしめながら歩かせていただきました。

奈良県浄化センターまで来たときには雨はやんでおり、神殿に着いたときには、それまでの疲れも吹き飛び、今までに体験したことのない感動を覚えたのを思い出した。

ます。込み上げてくる感情をおさえ、改めて親神様・教祖にお礼を申し上げ、有り難い気持ちでいっぱいになりました。

先人先輩方は、車や電車のない時代に、大変な思いをしながらも、常に喜び心を忘れないで、おちばへと帰られた一日があると思うと、私自身、ただただ反省する思いです。私にとって、おちばは近いようで遠い存在と気付きました。

しかし同時に、教祖を身近に感じずにはおれない、温かい存在だということも、改めて感じさせていただきました。御存命の教祖が

常に先回りをして、私を励ましてくださったこと。そして人や生き物を使い、また天気など自然現象を通して、先人たちの並々ならぬ歩みを、少しでも身をもって体験させてやろう、との大きな親心を身をもって感じる事ができた貴重な体験でした。

感謝と喜び心で

一昨年より、ご本部や大教会の行事や活動が制限される中、お互

いに今できることを少しずつ考え、取り組んでまいりました。これからも一步一步、取り組んでいかなければなりません。

大変なコロナ禍ではありますが、いろいろな悩みをもっている人や困っている人が、少なくないと思います。何か悩みがある人、困っている人がいれば、まず話を聞いてあげることが大切です。さらに、人に寄り添い、親身になって良い方法を一緒に考えるなどの、思いやりの心をもって通ることが大切なのです。

何よりも人をたすける心で寄り添い、親神様・教祖に少しでも喜んでいただけるように人を導くことが必要だと思います。

私たちは、日々親神様より結構な身体をお借りしていることに感謝し、その喜び心で、おちばへと常に心を向けること。そして、本年一年は、心づくりと理づくりに精いっぱい励み、年祭活動へと繋がっていきけるよう、心勇んで通らせていただきますように。

芦津大教会公式ホームページを始めました

芦津大教会公式ホームページでは、
未信仰の方に対しては、

→芦津大教会がどんな団体で、
何を目指しているのかを明示し、

芦津に繋がる
教会やようぼく、信者の方には、

→各部、各会の行事、諸願書についてなど
必要な情報をお知らせします。
ぜひご利用ください。



左の QR コードを読み取るか
下記の URL を直接入力して、
アクセスして下さい

<https://www.ashitsu.com/>

喜びの奉告祭

神殿落成奉告祭

津阪分教会

津阪分教会（北島久嗣会長・大
阪市東住吉区）は、2月11日、大
教会長をお迎えして、神殿落成奉
告祭を執り行った。随行は、守田
清一役員。

昭和8年に神殿が落成した津阪
分教会は、昭和37年に建物ごと現
在の地に移転。落成より88年の歳
月が経ち、老朽化による傷みが激
しく、神殿新築の運びとなった。

コロナ禍による世界的な建築資材
不足の中、念願であったおちぼの
方向を向いた神殿が無事に竣工を
迎え、10日に鎮座祭が勤められた。
大阪市内はコロナの感染拡大が治
まらないため、奉告祭は参拝者の
数を最小限にして勤められた。

午前11時、北島会長が祭文奏上。
「寄り集う者と、願いながらも帰
ってこれなかった人たちと共に」
と一同が心を合わせて勤める旨を
述べた。続いて大教会長が挨拶。

「芯がしっかりと心を定め、その
芯に心を合わせてそれぞれが役割
を果たして、建物に相応しい内容
の御守護を頂けるよう一手一つに
歩みを進めていただきたい」と話
された。

陽気におつとめが勤められた後、
北島会長が挨拶。「心のふしんを
目指して、御恩と感謝を忘れず、
にをいがけ・おたすけ、つくし運
びに力を尽くします」と決意を述
べた。



二月月次祭 祭典役割

二月月次祭 祭典役割											
祭主		扨者		扨者		座りつとめ		前 半		後 半	
大教会長		川畑澄博		賛者		山本義範		奥田眞治		花岡忠和	
指図方		賛者		賛者		河端芳雄		石川健郎		榎川康紀	
瀧本眞二郎		木村真次		村田光伸		望月恵美		中村寿々代		奥田正儀	
立花章子		宗我邦代		立花章子		中西義之		樋川泰士		新居里実	
吉田裕和		立花善文		立花善文		吉田裕和		立花善文		川畑正博	
吉田幸子		河合遊喜恵		河合遊喜恵		吉田幸子		吉田幸子		山本広子	
山本広子		西本美智恵		西本美智恵		西本美智恵		西本美智恵		西本美智恵	
西本美智恵		石川石美		石川石美		石川石美		石川石美		石川石美	
在籍者一同										伝供	
										守田清一	

事情はこび

立教185年2月26日お許し

加津佐分教会

任命

七代会長

小川 正弘
39歳



長崎県立小浜高校卒。平成18年おさづけの理拝戴。同年修養科第780期修了。令和3年教会長資格登録。高校卒業後、主に関東地方で就職し、帰郷後は農業に従事。農耕機限定の大型特殊免許を保持。

就任奉告祭 5月15日

教務部報

教人登録

吉田 真也 (今津原)
山田 博敏 (本津)

立教185年1月29日

教人資格講習会第118回修了

北村 真彦 (芦 姫)

立教185年2月10日

修養科第966期修了

多川 勇介 (善 徳)

立教185年2月27日

おさづけの理拝戴《1月》

石川 晋一 (直 轄)

石垣 智之 (哇 川)

吉田 晴菜 (哇 川)

天野 結規 (兵庫眞洲)

川村 昂平 (兵庫眞洲)

岩切さとよ (四ツ山)

外村君太郎 (アッシャー)

大塚 隼 (直 轄)

北尾 侑靖 (直 轄)

淵上 大幹 (直 轄)

水流 桜花 (直 轄)

伊地知潤平 (芦山都)

多川 勇介 (善 徳)

〔拝戴日順 13名〕

初席《1月》

〔1名直轄、吹田、島長、日

方、荏田町、豊野、紀

周、和鎮

〔順序運びより 8名〕

計 報

大教会婦人

島原分教会七代会長夫人

島大分教会三代会長 (島原部属)

岩切きよ姉 (いわきりきよ)



令和4年2月19日出直された。85歳。

告別式は、2月22日大教会長斎主のもと、島原分教会で執行された。

姉は、昭和13年1月2日父・福原登喜、母・ひでの長女として奈良県天理市に生まれた。32年2月おさづけの理拝戴、34年3月天理大学短期大学部卒業、37年9月修養科第255期修了、同年10月教会長資

格検定合格、同年12月岩切正幸と結婚、38年4月教人登録、平成20年4月島大分教会三代会長に就任、平成24年1月辞任。

岩切正幸・島原分教会七代会長と共に、生涯を通して信者を陰で支え、丹精に尽力された。また「子供たち全員が教会をもったことが一番の喜び」と常に話されていた。

教区では婦人会長崎教区主任を31年間務め、本部婦人会総会の開会の辞、会員代表決意などを行った。また長崎大水害や雲仙普賢岳噴火の際には災害隊や被災者の受け入れに真心の限りを尽くされた。

項 目	初	の	修	教
名 称 () 内教会数	席	おさづけ 理拝戴	養科修了	人
大 教 会 (1)	1	6		
東 津 (13)	1	2		
吉 野 (29)		1		
島 原 (16)	1			1
日 方 (15)	1			
稗 島 (7)				1
本 津 (2)				
始 良 (2)				
津 和 (12)	1			
門 司 (6)				
當 別 (26)		1	1	
大 沖 (3)				
尼 崎 (2)				
四 ツ 山 (5)		1		
大 冠 (2)				
島 下 山 (1)				
天 保 山 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)	1			
紀 周 (3)	1			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫眞洲 (2)		2		
芦 ノ 郷 (1)				
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	1			
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)				
真 明 彰 化 (2)				
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
真 伯 (1)				
合 計 (209)	8	13	1	2

月例統計 (自令和4年1月1日) 至令和4年1月31日)